

* 目次 *

〈最後の講演録〉人生マラソンを安らぎのうちに——南無アツバ……………	9
漂流——「南無アツバ」まで……………	37
「南無アツバ」の献祷のおひろめ——「在世間キリスト者の求道性」を求めて……………	87
私の血のなかに流れているもの——汎在神論から諸宗教の平和と共存へ……………	118
老いた友への手紙……………	171
一遍上人のお札くばりから「南無アツバ」のお札くばりへ……………	178
ガムラン音楽の話……………	186
〈最後の講話録〉毎夜思い出すアンマン空港の思い出……………	192

《井上洋治アーカイブス》

〈対談〉「南無アツバ」への道（山折哲雄／井上洋治）……………197

井上洋治神父 年譜……………224

〈井上洋治 人と思想〉⑤（山根道公）……………237

遺言的著作をめぐる最後の日々——遠藤周作『深い河』との響きあい

装幀 熊谷博人

のです。つまりそこにイエスさまの十字架の死の深い、深い意味があったのです。

『ヨハネによる福音書』には、死を前にしての弟子たちへの次のようなイエスさまの別れのお言葉が載っています。新共同訳聖書で一緒に読んでみましょう。

あなたがたの心は悲しみで満たされている。しかし、実を言うと、わたしが去って行くのは、あなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。

(一六章六―七節)

父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。この方は、真理の霊である。……わたしは、あなたがたといたときに、これらのことを話した。しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。

(二四章一六―一七節、二五―二六節)

「弁護者」と訳されている言葉は、パラクレートスというギリシャ語です。もともとは法律用語であり、法廷で被告を弁護し、守る立場にある人のことを指す言葉です。日本語の聖書では、「慰め主」や「守護者」と訳されるようですが、私は「守護者」と訳するのがよいのではないかと思っています。いずれにしても意味するのは、イエスさまの亡きあと、アッバのブネウマ³——息吹、霊、風——として、私たちを常に

3 「風」「息吹」「霊」を意味するギリシャ語。新約聖書などでは、神の霊を指す「聖霊」とよく訳出される。

守り、導き、教えてくださる方のことです。日本のキリスト教会では、「聖霊」と言われますが、「霊」という言葉はあまり日本語になじまないと思いますし、信仰上では、「聖霊」は神様なので、もともと私たちの膚に素直に受け入れられるように、「聖なる風」とか、「おみ風さま」と申しあげたいとは思っています。

裏切っていく自分たちを赦してくださいだった師イエスのまなざしのなかに、おみ風さまに包まれ教えられて、アッバの赦しのまなざしを痛いほどにその深層意識にくいこまされた弟子たち。彼らが「モーセ五書」の勧善懲悪の神ヤハウエを去り、赦しの神アッバへと転向するところに、イエスさまの福音、キリスト教が誕生し開花したのだと思います。イエスさまの「復活顕現物語」は、このような弟子たちの、通常の言語を超えた深い宗教体験が物語化されたものと考えてよいでしょう。

エマオの物語にみる、イエスのゆるしのまなざし

その意味で、『ルカによる福音書』二二章の「エマオの旅人への顕現物語」はもつともこのことをよく表していると思うので、ご一緒に考えてみたいと思います。

この物語は、クレオバと呼ばれるイエスさまの弟子ともう一人が、イエスさまが十字架上で亡くなられたあと自己嫌悪と絶望にとらわれながら、暗い心で夕暮のシヤロンの野をエマオにむかつて歩いていく

4 旧約聖書の最初に置かれる五つの書。『創世記』『出エジプト記』『レビ記』『民数記』『申命記』からなる。

一遍上人のお札ふだくばりから「南無アツバ」のお札くばりへ

一遍上人が歩かれた熊野古道

いまからもう十年以上も前である一九九九年八月、私は時宗の創始者である一遍上人の御跡をおしたいする旅にでました。一遍上人は、法然上人さまとならんで、私をもっとも尊敬し、私淑している高僧の一人で、とくに私は上人さまの求道のはげしさというものに、ずっと心を打たれていましたので、その求道のきびしさに少しでもふれてみたいと思っていたからです。

最初訪れた四国の岩屋寺では、こんなきびしい修行をなさったのかとただただびっくりしましたが、窪寺跡をさがすのには本当に苦勞しました。ものすごい暑さのなかを二時間以上もさがし歩いた末にやっと静かな畠のなかに窪寺の草庵の跡をみつけることのできたときの嬉しさは忘れられません。

私は、窪寺の草庵跡と岩屋寺で、書物や概念の上ではなく、実際の私の足と心で上人さまの求道のきびしさをしっかりと捉えることができたので、その点大變に満足したのですが、今回の旅は私にとって別のねらいが中心にありました。

それは、熊野本宮でふつうに「熊野権現の神勅」と呼ばれている熊野権現の啓示と「賦算ふさん」（お札ふだくば

り)とが、上人さまの宗教体験のなかでどのようにつながっているのかを少しでも体得させていただきたいというねらいでした。ですから心を四国の窪寺跡に残しながら、もう暮れはじめた四国の田舎道を紀伊の串本へと足を向けたのです。上人さまが足をふみしめながら歩かれた熊野古道を、私もまたしっかりと私の足でふみしめたからです。

うまく言葉では言えないのですが、上人さまが歩かれた、うつそうとした深いみどりにかこまれた熊野古道の巡礼は、上人さまの思いが私の行脚にのりうつってこられているような思いで、実に感慨深いものでした。

湯の峰温泉の宿に一泊し、隣に建っている天台宗の東光寺という寺に立ち寄ったところ、その若い住職の方が、一遍上人さまが訪れたときの熊野本宮は現在の場所ではなく「熊野本宮大社・旧社地」と呼ばれているところにあつた、と教えてくださったので、まずはとりあえず車でそちらの旧社跡に行くことにしました。

この旧社跡は現在の本宮や那智の滝などのように、観光客でごつたがえしているところとは全く違っており、既にところどころはすこし黄ばみはじめている緑の森の一角にあつて、実に人一人いない閑散とした広い空地になっていました。

上人さまがあるいはおふれになったかもしれない礎石の一隅に腰をおろして、かつて『一遍聖絵』の中で読んだうろ覚えの神勅のなかのお言葉を何となく思い出しながら、私はしばらくの間、木もれ日と風のささやきにぼんやりとよいしれておりました。それは、半ば快く、半ば重苦しく私の心をとらえていたようでした。おぼろげな記憶ながら、「熊野権現」が山伏姿で上人さまに語られたという次のような意味のお言葉が、私のちっぽけな人間のさかしらをおさえこんでいたからだったのでしょうか。

《井上洋治アーカイブス》

〈対談〉「南無アツバ」への道（山折哲雄／井上洋治）

宗教的天才、テレーズ

山折 先生がキリスト教に関心をお持ちになった当時のご体験と、晩年になられてからのご体験とはかなり違うのではないかと想像するのですが、そのあたりからお話いただけますか。

井上 私は、十代の後半、中学の三年くらいから、死の問題に徹底的に苦しめられました。死というものはとにかく勝てないし、逃げられないし、どうにもならない。何かどこまでも続いている海岸の砂粒が右から左へ移っていく、そしてその前後には完全の沈黙が支配しているというような心象風景があったんですね。その一粒の砂のような人生にどのような意味があるのかということに非常に悩まされて、何とかしないと苦しくて仕方がなかった。

もう一つは矛盾しているようですが、本当に人を大切にするとどうか、悲しんでいる人、苦しんでいる人の気持を写し取れるような人間になりたかったんです。その二つが私のなかにうごめいていて、宗教に道を求めることになったのです。

山折 そうでしたか。

井上 私の家は特に宗教色があるという家ではなかったのですが、たまたま姉がミッシェン・スクールに通っていて、私がひどく悩んでいたものですから心配して、神父のところにつれていってくれ

たんです。

山折 カトリックですか。

井上 そうです。プロテスタントの教会にも行きましたけれども、何だかキリスト教は敷居が高くてね。お寺にも行きましたが、お寺の庭は入りやすいんですけども、庫裡を叩いて「死とは何ですか」とお坊さんに聞くだけの勇氣はなかった。教会やお寺の周りを三年くらいまわりましたか、当時からたまたまフランスの聖者でリジューのテレーズという人の自叙伝を読んで、ものすごい感動を覚えたんです。

山折 テレーズというのはどんな方ですか。

井上 小学校しか出ていない少女で、十六歳で修道院に入って二十四歳で死んだ、私に言わせると宗教的な大天才です。その自叙伝を読んだ時に何か光をもらったような気がしたんです。それで、生死を解脱するというか、本当に人を愛するというのは、エゴイズムでがんじがらめになっていたのではできないのではないかということに思い至った。どうしたら生死を解脱できるのかというと、それは幼子の心になって、親に任せるといことなのだということだけを九年間彼女に謳ったわけです。幼子のような気持ちで神様に任せきったら、生死を解脱して、何か本当に人の悲しみが映せるような人間になれるのか、と思ったんですね。その人はカトリックの修道女ですから、まず、カトリックになりました。

山折 何歳でしたか。

井上 二十歳ですね。

山折 そのころには東大に入っておられた。

井上洋治神父 年譜

(作成・山根道公)

<p>一九二七年(昭二) 六歳</p> <p>一九三三年(昭八) 十二歳</p> <p>一九三六年(昭一一) 九歳</p> <p>一九三九年(昭一四) 十二歳</p> <p>一九四三年(昭一八) 十六歳</p> <p>一九四四年(昭一九) 十七歳</p> <p>一九四五年(昭二〇) 十八歳</p>	<p style="text-align: center;">主な出来事</p> <p>三月二八日、父・重治と母・アキの次男として、神奈川県津久井郡串川村の母の実家出生。七歳年上の姉・悦、五歳年上の兄・英治、二歳年下の弟・坦の四人兄弟。九月頃、父の転勤により大阪の天王寺に移る。体力も知力も優秀な兄に比べて、幼少時代には虚弱な体質で胃腸が弱く、就学後もよく学校を休み、成績も兄より劣っていた。</p> <p>幼稚園の頃、母に手をひかれながら眺めた夕焼け空が心の奥底に焼き付く。</p> <p>三月、二葉幼稚園卒園。四月、大阪天王寺第六尋常小学校入学。九月、一年生の二学期から父の転勤で東京・市ヶ谷に移り、牛込北町の愛日尋常小学校に通う。</p> <p>小学三年生、可愛がっていたアカという子猫が皮膚病にかかって棄てられたことで、別れと哀しみといった最初の人生体験を味わうと同時に死への恐怖の感情が芽生える。</p> <p>四月、府立四中(現・東京都立戸山高等学校)に進学(四年で修了)。</p> <p>四月、旧制東京高等学校(理科甲類)に進学し、入寮。</p> <p>中学三年生の頃より心の奥底を横切ることになった、すべてが空しく無意味であるというニヒリズムへの戦慄と死への恐怖の闇が、高校に合格してからもさらに心に広がり、苦しみのなかで自死の誘惑さえ感じるようになる。</p> <p>高等学校二年より、勤労働員で亀有の工場に駆り出される(二年で修了)。</p> <p>三月一〇日、東京大空襲で東京・市ヶ谷の自宅が焼け、津久井にある母の実家(離れ)に一</p>
---	--

一九四七年（昭三二）二十歳

家で疎開する。四月、東京工業大学（窯業学科）に進学。八月一五日、東京・中野の下宿から、夏休みで母の実家に帰っていたときに終戦を迎える。この頃、アンリ・ベルクソンの『自由と時間』（岩波文庫）を読み、彼の思想に出会い、ニヒリズムの心の闇から解放される。哲学を専攻しようとして決心し、東京工業大学を中退する。四月 東京大学（文学部哲学科）に進学。

四月 東京大学（文学部哲学科）に入部し、上智大学のデュモリン神父の「キリスト教入門講座」に出席する。

一九四八年（昭三三）二十一歳
この頃、姉が残していった小さき花のテレジア（リジューの聖テレーズ）の『自叙伝』を読み、彼女の掴みえたものを自分のものにしようと決心する。

三月二七日、デュモリン神父から受洗。洗礼名は、テレジアに深い影響を与えたカルメル会の神秘思想家、十字架のヨハネ。初めて自分の道を踏みしめた充実感をえて、どこまでも続く白い一筋の道を、力の限り行けるところまで歩んでいこうと決意する。

この年、家族は東京・世田谷の九品仏という寺の近くに引越す。

一九四九年（昭二四）二十二歳
大学二年の終わり頃、カルメル会の男子修道院に入会したい希望を父に申し出て、大反対される。テレジアの実姉のアグネス修道女（ポリーヌ）に手紙を書き、「私は、聖なる小さな妹に、いつもあなたと一緒にいるようにお願いしてあげます」と書かれた返事のカードを受け取り、決意は固まる。男子のカルメル会が日本にないために、東京・練馬の女子カルメル会に相談し、フランスの男子カルメル会に入ることが決まる。

一九五〇年（昭二五）二十三歳

三月、卒業論文「パスカルにおける認識と秩序」を書き上げ、東京大学を卒業。五月、詩「願い」を渡仏の前に書く。六月四日、豪華船「マルセイエーズ号」に乗り込み、横浜港を

〈井上洋治 人と思想〉⑤

遺言的著作をめぐる最後の日々

——遠藤周作『深い河』との響きあい

山根 道公

最初に本巻の解題と解説について一言触れておくと、他の巻では別になっているが、本巻では解説を解題に含めた形で進めていく。

二〇一四年二月、車椅子にやっと座るほどに体力の衰えた井上洋治神父から、ずしりと重いA3サイズの大きな封筒を渡され、「没後にできれば出版してほしい。一応、メモを入れているが、題や編集はすべて任せる」と言われた。封筒の表には「遺言的著作」と大きく書かれていた。それから一か月もたたない間に井上神父は帰天し、私が受け取った原稿は遺稿となった。封筒の中にはA3用紙に拡大コピーされた原稿に手を加えたものが入っていた。本巻は、それらをもとに編集した遺稿集である。

その中であつたメモに記された題名は、〈『南無アツバ』の祈り〉 井上洋治の遺言的著作―東洋の精神的土壌

にきれいに開花するキリスト道―であつたが、副題は長いため割愛せざるを得ず、『遺稿集「南無アツバ」の祈り』となつた。このメモからも、この遺稿集は、井上神父が自らの差し迫つた死を意識し、遺言という思いをもつて、最晩年に書いた文章を集めたものであり、その中心テーマは、井上神父が生涯を賭けて求め続けた、キリストの福音を日本（東洋）の精神的土壌に文化内開花させるという課題であつたことが窺える。それを追い求めた結実、すなわち日本の土壌にイエスの福音が根をおろし、きれいに咲いた花が「南無アツバ」の祈りであるという思いが、この題名には込められていよう。

「神父さまも、安岡も体を悪くして我々世代が人生を完了するのも、そう遠くありません。あなたたちが是非今度は頑張ってください」

この便りを私が遠藤周作からもらつたのは一九九四年だつた。その前年に刊行された遠藤の『深い河』に対する拙論を、井上神父が主宰する『風の家』の機関誌『風』^{フネウマ}に連載したものを読んでくれたの返事だつた。それから二十年、遠藤周作も安岡章太郎も、そして井上洋治神父も人生を完了した。私は、井上神父が一人でも多くの日本人たちにイエスの福音の喜びを知ってほし

い」と願ってはじめてた「風の家」運動を創設の時から三十年近くともに行いながら、遠藤の文学と人生、および遠藤と井上神父の影響や関係も研究のテーマとしてきた。

井上神父と遠藤周作は、一九五〇年、渡仏の船で偶然出会った。帰国後は日本人の心情でイエスの教えをとらえ直すという同じテーマを背負っていることを知り、生涯を賭けて先人のいない世界を切り拓き、次世代の踏み石になろうとともに決意し、支えあつてきた同志であつた。そして、次世代のための踏み石として遠藤が「万病一身に集まり、余命の少なきを感じ」「文字通り骨肉をけずり」（『創作日記』）最後に置いた遺言的著作ともいえるのが『深い河』であり、井上神父のそれに当たるのがこの『遺稿集「南無アツバ」の祈り』であるといえる。

そうした同じテーマを背負つてきた二人の遺言的著作には、響きあう世界が見出せる。そうした点を、井上神父の個々の文章の解題とともに言及し、二人が次の世代のために置いた踏み石についても触れたいと思う。

なお、本書は遺稿集としての性格上、同じ話が二度、三度と出てくるという内容の重複があるが、それぞれ個別の文章であり、重複するのはそれだけ遺言的に伝えたい思いの強い内容ということでもあるので、そのまま収録している。

収録作品の執筆・発表の時期は、二〇〇六年（七十九歳）から、二〇一四年三月（八十六歳）の帰天までの間で、本書の最初と最後の文章は、講演・講話録に手を入れたものである。

二〇〇六年は、井上神父が日本人の心の琴線にふれるイエスの顔を求め続けたライフワークを結実させた『わが師イエスの生涯』（本著作選集第4巻所収）を書き終え、刊行した翌年である。また、日本の文化的風土のなかにイエスの福音が根をおろし開花することをめざして井上神父が主宰した「風の家」運動も二十周年を迎え、その記念の感謝のミサの後で「南無アツバ」のお守り札が初めて配られ、新たな展開がはじまった年でもあつた。

一月には井上神父は身辺を整理し、「風の家」の住居を、それまで住んでいた西早稲田の住居より大分狭くなる東新宿のマンションに移した。そして、十五年間毎日曜日に赤坂で行っていた「風の家」のミサもクリスマスミサを最後にして終り、二〇〇七年一月からは、四谷の幼きイエス会の聖堂で毎月一回、「南無アツバ」のミサをあげる形に移行した。移行の理由については、赤坂に向いて毎日曜日にミサを捧げるといふ義務感の重みに対して体力的にも自信を失つたという老いの問題と、